

大形建物跡のケヤキ柱



●コレクション・データ

時代 弥生時代中期
調査 唐古・鍵遺跡第74次調査
発見年 1999年
大きさ 残存長143.6cm、直径59.6cm
展示位置 第1室「遺跡の発見と発掘調査」

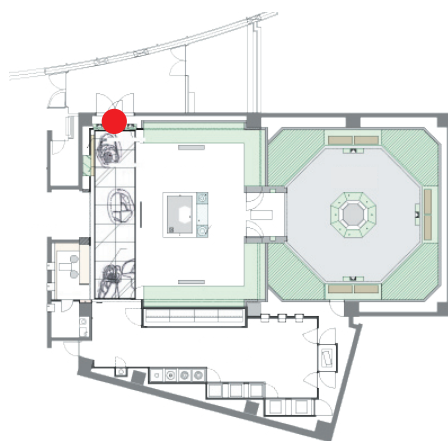
ミュージアムに入ると、ガラス張りの床下に再現された発掘現場が、来館者の目を引きます。これは、唐古・鍵遺跡で初めて見つかった大型建物跡の一部です。また、入り口の左手には、この時に出土した柱を展示しています。

この柱は、直径60センチもあるケヤキ材で作られており、表面には石斧で削った明瞭な加工痕が残っています。また、柱の下部には、運搬用に紐を通したと考えられる「目渡穴」と呼ばれる貫通孔があげてられています。さらに2003年の第93次調査では、このような目渡穴に蔓を巻いたものが見つかりました。

この柱を据える穴は、斜めに傾斜がつけられており、運んできた柱を斜めに差し込んだ後に、一方から引張って建てたと考えられます。また、建物の解体時には、柱は抜き取られ再利用されたようですが、この柱は、再利用されずに邪魔になつたため、倒して埋めたものでしょう。

ところでこの柱が使われた建物は、梁行（建物短辺）6・8メートル、桁行（建物長辺）11・6メートルの長方形が想定され、19本の柱で構成されていたようです。面積はタタミ50畳に相当し、当時の建物としては最大級です。特に注目されるのは、妻側（建物の短辺）の外側に独立棟持柱と呼ばれる柱が見られることです。独立棟持柱を持つ建物は、唐古・鍵遺跡で出土した絵画土器にも描かれており、切妻造の屋根をもつ高床式の建物と考えられます。

このような建物は神明造と呼ばれ、現在、伊勢神宮で見ることが出来ます。独立棟持柱をもつ建物が、古い神社建築に類似することから、これを「神殿」と考える研究者もいます。建物の性格については、さまざまな説があり決着していませんが、弥生時代の社会構造や建築を考えるうえで重要な意義をもつことは確かです。



ミュージアム上面図と展示位置